

「いすみ生物多様性戦略」2015-2020

対策の7つの柱と特徴的な活動

1. 里山里海の自然・文化の保護・保全

ミヤコタナゴやゲンジボタル、アカウミガメ等の保護活動とともに、イスマスズカケ生息地を文化財に指定。コウノトリの飛来も度々ありました。様々な生きものが暮らす夷隅川河口干潟では、干潟に点在する塩性湿地の水質保全のため、葦の移植が行われました。

2. 里山里海の放棄・荒廃地の再生・管理

市民一体の活動組織「自然と共生する里づくり連絡協議会」が推進する生物多様性を育む有機稲作は、30ヘクタールに拡大しています。市民団体による里山・竹林整備が活発に行われています。

3. 外来生物・野生鳥獣害の防除・管理

野生鳥獣のモニタリング調査を実施し、捕獲事業を計画。有害鳥獣駆除隊の活動や電気柵の設置により、捕獲頭数が増加しました。農作物への被害や市街地への影響の縮減に努めています。

4. 地域環境や先人の知恵の学び・継承

小学5年生に総合学習「いすみ教育ファーム」を実施しています。子どもたちは有機米づくりや生きもの調査、暮らしや農業の変遷を学び、生物多様性が地域に豊かな恵みをもたらしていることを知ることができました。

5. 生命感じる自立・循環のライフスタイル

全国に先駆け、いすみ市の学校給食に使用されるお米は、100%いすみ市でとれた有機米になりました。野菜も7品目を有機野菜で賄っています。有機水田や有機畑では、子どもたちに向け様々な体験が行われています。自然と共生する健全な農業と食が、教育の中で一体的に展開されています。

6. 生物多様性を活かした産業創造

いすみ生物多様性戦略は、生物多様性を育む健全な農林漁業と経済が両立する姿を目指しています。

有機米「いすみっこ」はブランド化に成功しています。

漁業は、「いすみブランド」として量から質に転換し、資源量の適正管理に努めています。

「港の朝市」は、毎週多くの人で賑わい、「ONSEN・ガストロノミーウォーキング」など、食をテーマとしたイベントも好評です。

有機米のオーナー制度では、首都圏から多くの来客があります。

産品の多くは、ふるさと納税返礼品として活用されています。

7. 生物多様性を担う組織・拠点の設置

生物多様性いすみステーション（仮称）は設置できませんでしたが、自然と共生する里づくり連絡協議会を中心に、NPOや市民、千葉工業大学や研究機関、関係機関等と様々な連携が行われ、いすみ生物多様性戦略にかかる施策が強力に推進されました。



イラスト：シミキョウ